

平成12年3月18日(土)
~6月18日(日)

過去・
現在



SAYAMA
の
埋蔵文化財展

未来・これまで

講演会

演題
日時
定員
場所
講師
申込

「おもしろ考古学一埼玉の発掘最前線一」
平成12年4月16日(日)午後1時30分から
50名
狭山市立博物館 研修・講義室
駒宮史朗氏(埼玉県立博物館専門調査員兼常設展示課長)
3月18日(土)9時から電話で博物館へ
☎042-955-3804

展示解説

日時 平成12年3月25日(土),4月22日(土),5月27日(土)
各日とも午前10時から(事前申込は不要です)

狭山市立博物館

埼玉県狭山市稲荷山1-23-1 稲荷山公園内 TEL042-955-3804 FAX042-955-3811

開催にあたって

文化財は、歴史や文化などを理解するために欠くことのできない資料であり、貴重な財産として次世代に受け継がれていかなければならぬものです。ことに埋蔵文化財は、大地に刻まれた歴史として、時を超えて再び光の世界に姿をあらわした過去の語り部です。これら一点一点が物語る歴史は、先人のさまざまな営みを現在に伝えており、これらを未来への遺産として後世に伝えていくことは、過去と未来をつないでいる現代の私たちの責務であります。

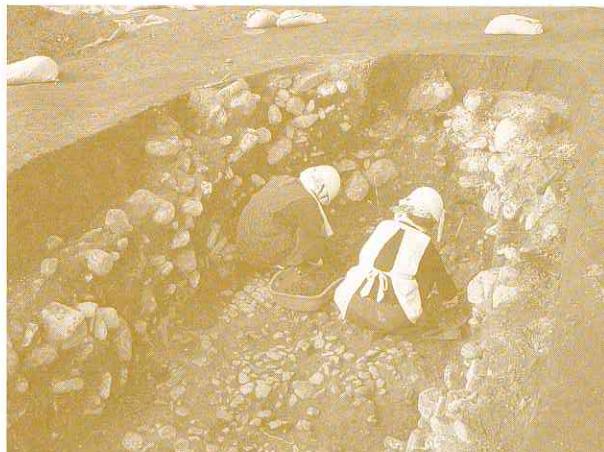
今回の企画展では、狭山の埋蔵文化財に対する行政の取組みと、その成果を理解していただくために、狭山の発掘調査の歴史から調査成果、そして21世紀に向かっての埋蔵文化財のあり方について論及します。特に調査成果として狭山市内で出土した埋蔵文化財資料については、編年、遺構、遺物という側面から分類して展示し、それぞれの資料から知ることのできる世界を紹介します。

この展示をとおして、どのように狭山の埋蔵文化財が取り扱われて現在に至っているのかを知り、さらに21世紀に向かってどのように取り扱っていかなければならないのかについて、みなさんと考えていきたいと思います。また、現在も地道に進められています発掘

調査や整理作業、地域における文化財の保護・活用とその重要性の指導啓蒙など、埋蔵文化財行政の一端について、理解を深めていただければ幸いと存じます。

最後に、本展開催にあたり、貴重な資料を快くご出品賜りました関係各位、並びにご多用の中をご指導・ご協力賜りました多くの方々に対し、心より厚くお礼申し上げます。

平成12年3月 狹山市立博物館



発掘のようす 上広瀬古墳群



深鉢 勝坂式土器(縄文時代中期)

INFORMATION	
開館時間	午前9時～午後5時
休館日	3/21.24.27 4/17.24.28 5/1.8.15.22.26.29 6/5.12
入館料	一般…………… 150円 高校生・大学生… 100円 小学生・中学生… 50円 ※第2・4の土曜日は小・中学生は無料です。
住所	埼玉県狭山市稻荷山1-23-1 稲荷山公園内 TEL042-955-3804 FAX042-955-3811
交通	西武池袋線「稻荷山公園駅」から徒歩3分 西武新宿線「狭山市駅」西口よりバス(稻荷山公園行き)終点 徒歩3分 圏央道狭山日高インターより車で15分



現
在
・
過
去



SAYAMA
の
埋蔵文化財展

未来・歴史アーカイブ

平成12年3月18日(土)~6月18日(日)

狭山市立博物館

開催にあたって

文化財は、歴史や文化などを理解するために欠くことのできない資料であり、貴重な財産として次世代に受け継がれていかなければならぬものです。ことに埋蔵文化財は、大地に刻まれた歴史として、時を超えて再び光の世界に姿をあらわした過去の語り部です。これら一点一点が物語る歴史は、先人のさまざまな営みを現在に伝えており、これらを未来への遺産として後世に伝えていくことは、過去と未来をつなぐ現代の私たちの責務でありましょう。

今回の企画展では、狭山の埋蔵文化財に対する行政の取組みと、その成果を理解していただるために、狭山の発掘調査の歴史から調査成果、そして、21世紀に向かっての埋蔵文化財のあり方にについて論及します。特に調査成果として狭山市内で出土した埋蔵文化財資料については、編年、遺物、遺構という側面から分類して展示し、それぞれの資料から知ることのできる世界を紹介します。

この展示をおよそ、どのように狭山の埋蔵文化財が取り扱われて現在に至っているのかを知り、さらに21世紀に向かってどのように取り扱っていかなければならないのかについて、みなさんと考えていきたいと思います。また、現在も地道に進められています発掘調査や整理作業、地域における文化財の保護活用とその重要性の指導啓蒙など、埋蔵文化財行政の一端について、理解を深めていただければ幸いと存じます。

最後に、本展開催にあたり、貴重な資料を快くご出品賜りました関係各位、並びにご多用の中をご指導・ご協力賜りました多くの方々に対し、心より厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

狹山市立博物館

凡 例

- ・このパンフレットは、平成12年3月18日から6月18日まで開催する平成11年度春期企画展「狹山の埋蔵文化財展—過去、現在そして、未来へ—」のパンフレットである。
- ・会期中に展示替えを行うため、パンフレット収録資料でも展示されていない場合がある。
- ・展示資料については、埼玉県埋蔵文化財センター並びに狹山市教育委員会社会教育課の協力を得た。



埋蔵文化財を考える

埋蔵文化財と考古学

埋蔵文化財とは、土地に埋蔵されている文化財の総称で、その種類には遺跡と遺物に大別されます。遺跡とは、一般的には遺物が地面に広範囲に散布している場合、地名（主に小字名など）をつけて呼びますが、住居や古墳など土地と引きはなすことができない個別のものや、遺物が出土しなくとも遺構と認められるものも含まれます。また遺物とは、調査などにより埋蔵文化財があると考えられる土地からの出土品をさします。

埋蔵文化財は、出土した時点で包括的に扱うことによりその資料的価値がある反面、それが個別の資料として扱われることで資料的価値が下がり、ひいては不用物同様になってしまうことがしばしばあります。このような埋蔵文化財を科学的に検証し、文献にも記録されない世界を明らかにする学問として、考古学による研究法が採り入れられています。考古学は、現在は歴史学の補助学として遺跡や遺物を資料にして過去を研究する学問ですが、元来人類学の一部門として研究されていたことから、土器の文様の差異により時代を判別する型式学や、上層のものが下層のものより新しいといった層位学など、科学的な根拠に基づく研究法が発達しています。現在では、放射性同位元素による年代測定法や花粉分析による植生復元など、理化学的手法による研究も進められているところです。

日本の発掘の歴史

遺跡が文献に出てきた事例としては、『常陸國風土記』の中に、大男が海から蛤を捕って食べ、その殻が丘になってしまったという話が出ています。その丘の名は大串と呼ばれ現在も茨城県水戸市内にある大串貝塚として知られています。

また、日本で初めて発掘調査を指揮したひととして、「水戸のご老公」で有名な徳川光圀がおります。水戸藩の一大事業であった『大日本史』編さんの資料として下野国車塚という前方後円墳を発掘しました。彼は埋められていた資料は元のとおりもどしておくべきであるという考えを持っていたため、出土品については詳細な記録を残して再び埋納したと記録にあります。

明治時代になると、発掘も新しい時代に入りました。E・S・モースが電車の窓から大森貝塚を発見したことはみなさんご存じだと思いますが、当時は人類学の補助学として発掘が行われ、吉見の百穴の発掘を手掛けた坪井正五郎などが活躍しました。また、科学的研究法が西洋から伝えられ、浜田耕作の型式学、松本彦七郎の層位学の導入は、珍品をさがす発掘から日本の考古学を脱皮させたといえるでしょう。

大正時代から昭和の初めになると、各地で大規模な発掘が行われました。主に発掘された地域は、地表からも遺跡の確認が簡単である貝塚が中心となりました。特に埼玉県では、岩槻市真福寺貝塚の調査が行われた後、昭和3(1928)年に貝塚群調査が行われ、蓮田市黒浜貝塚・関山貝塚、富士見市水子大心寺貝塚などが調査されました。

第二次世界大戦になると、登呂遺跡の発掘、岩宿遺跡による旧石器時代遺跡の発見など新しい成果が生まれる中、文字資料が出現する以前の歴史が次々と解明されてきました。最近では、宮城県座敷乱木遺跡(旧石器時代)、青森県三内丸山遺跡(縄文時代中期)、佐賀県吉野ヶ里遺跡(弥生時代)などの大規模遺跡での成果があがっています。加えて、測量計測や資料整理など精密かつ根気のいる作業実績の結果、発掘調査における実物資料の実証性が高く評価され、文字資料が出現する以後の歴史についても発掘調査が行われ、歴史の時代区分に沿った歴史考古学として研究が進められています。大規模調査としては、東京都汐留遺跡(江戸時代～大正時代)などがあります。特殊な例としては、水没した遺跡や遺物を調査する水中考古学による発掘調査も行われており、長崎県五島元寇関連調査(鎌倉時代)などがあります。

また、発掘調査の世界にも日進月歩で新しい技術が導入されています。発掘において、バ

ックホーなどの重機の利用はかなり一般的になりましたが、道路に面していない遺跡の発掘や、細部にわたる遺構の判別などではまだ手作業で行う部分もかなりあります。しかし現在では、地面を掘らずに遺構や遺物を探索する手法も多くとられ、島根県荒神谷遺跡での金属探知機による青銅器の大量出土は、記憶に新しいところです。狹山市周辺でも、川越市河越館跡では、レーダー探査により中世方形館跡の堀跡の位置を確認し、未解明であった中世豪族の居館研究に一石を投じています。発掘調査後の整理作業においても、土器の作図などではパソコンを使った作図法が開発され、二次元・三次元の作図が可能となり、縄文土器の文様作図や遺跡の復元想像図なども容易にできるようになりました。

埋蔵文化財を守る　—現在の埋蔵文化財行政—

狹山市の埋蔵文化財については、狹山市教育委員会社会教育課文化財担当を窓口としてその保護についての指導・啓蒙などを行っています。埋蔵文化財の定義については、文化財保護法第57条に「土地に埋蔵されている文化財」と規定されており、有形文化財の中の考古資料、記念物の中の史跡などもこれに含まれると考えられます。その種類では、遺跡と遺物に大別されます。遺跡とは、一般的には遺物が地面に広範囲に分布している場合、地名(主に小字名など)をつけて呼びますが、住居や古墳など土地と切り離すことができない個別のものや、遺物が出土しなくとも遺構と認められるものも含まれます。また遺物とは、調査などにより埋蔵文化財があると考えられる土地からの出土品をさします。

考古学的調査の中で、表面採集による分布から遺物が確認できた土地を埋蔵文化財包蔵地といいます。埼玉県では、昭和46・47年度に実施した県全域での分布調査に加え、昭和63年度より遺跡台帳及び埼玉県遺跡地名表を作成し、新規発見の遺跡をも含め、現在も隨時台帳整備を進めています。埋蔵文化財包蔵地である遺跡の中で、歴史上学術上価値が高いものについては、埼玉県選定重要遺跡に選定しています。狹山市内では、笛井地区の宮地遺跡と東八木窯跡群が選定されています。

また、埋蔵文化財を保護する観点から、埋蔵文化財包蔵地を開発事業区域とする場合には、事前に市の教育委員会と協議する開発許可制度を導入しています。これには、包蔵地以外で埋蔵文化財を発見した場合でも、工事を中断し現状を変更することなく、市の教育委員会と協議しなければならないとしています。同様に、狹山市では年一回文化財パトロールを実施しています。

埋蔵文化財保護行政の中の一部をここでとりあげましたが、埋蔵文化財を保護していく上で重要なことは、包蔵地の土地所有者のみならず地域住民の理解と協力を得て、初めてこの文化遺産を保存活用できるということです。こうした活動の中で、博物館も文化財行政の啓蒙に寄与していく役目を持っています。



重機を使用した発掘調査

狭山の埋蔵文化財

狭山の発掘の歴史

狭山市域では、市の中央を流れる入間川の河岸段丘上を中心に、遺跡や古墳が点在することが、土地の耕作者や郷土史家の間で古くから知られていました。昭和26(1951)年に発行した『埼玉県史』(旧版)には、狭山市域の遺跡・古墳として19ヶ所をあげています。

昭和26年11月には入間川町史編さん事業に基づき、狭山市域で最初の発掘調査として、天岑寺東側(現在の下向沢遺跡)を発掘調査し、縄文後期と考えられる住居跡や土こうを確認しました。

昭和30年代になって市内における本格的な考古学的調査が始まり、昭和36(1961)年埼玉県教育委員会が埋蔵文化財の全県的遺跡分布調査を実施し、市内で12ヶ所の遺跡の所在を確認しました。

昭和40年代の高度経済成長政策により、狭山市においても急激な人口増加から宅地造成や道路整備が行われ、昭和44(1969)年には今宿遺跡の発掘調査が行われました。約7万平方メートルの調査区域からは、9世紀代の竪穴式住居や大量の土師器・須恵器が出土し、大きな成果があげられたため、遺跡公園として残すため竪穴式住居跡1軒を復元しました。昭和45(1970)年11月には七曲井の発掘調査で、名前の由来となった七曲りの道などその構造が明らかとなり、板石塔婆2基などが出土しました。昭和46(1971)年2月には宮地遺跡が発掘調査され、縄文時代中期の竪穴式住居跡2軒、敷石住居跡1軒が確認されました。特に完全な姿をした敷石住居跡は類例少なく貴重なものであり、これらの発見から宮地遺跡は、埼玉県選定重要遺跡に指定され、当市を代表する縄文時代の遺跡として評価を受けています。

また、昭和46・47年度には埼玉県による県下一斎の遺跡分布調査が再度実施され、狭山市に係わる埋蔵文化財包蔵地が45ヶ所と、昭和36年と比較すると約4倍もの遺跡が新たに確認されました。

昭和50年代になると大規模な発掘調査依頼が増え、昭和52・53(1977・78)年には城ノ越、宮ノ越両遺跡で、昭和56(1981)年には宮地、揚櫨木両遺跡で調査が実施されました。昭和56・57年度には、市史編さん事業の一環として、県規模を上回る詳細な遺跡分布調査が実施され、66ヶ所の埋蔵文化財包蔵地の所在が確認されました。このころからの発掘調査の中には、当市内で最初の古墳時代の住居跡が確認された滝祇園遺跡、奈良・平安時代の大集落跡で和同開珎などが出土した揚櫨木遺跡など大きな成果をあげたものもあります。

昭和60年代では、奈良・平安時代の遺跡での大規模発掘として小山ノ上、森ノ上両遺跡の発掘が行われました。特に昭和60(1985)年から6回にわたり調査された小山ノ上遺跡では、中世の空堀跡が確認され、従来知られていなかった遺跡の可能性を明らかにしました。また森ノ上遺跡では、今宿遺跡に隣接する集落跡が確認されました。

平成の時代に入ると、今まで確認されていなかった時代の遺物、遺構が発見されました。平成元(1989)年には上広瀬古墳群で、6世紀後半ごろの円墳5基が確認され、横穴式石室のある墳墓が検出されました。また縄文時代についても、中期の土器が大量に出土した平成3(1991)年丸山遺跡、中期から後期にかけての遺物、遺構が確認された平成4(1992)年字尻遺跡、早期の押型文土器片が出土した平成5(1993)年高根遺跡、前期の遺物、遺構が確認された平成7(1995)年稻荷上遺跡、未確認であった後期の土器が出土した平成10(1998)年城ノ越遺跡など多くの調査成果が生まれています。

このような発掘調査の成果は、文献資料の乏しい時代背景を明らかにし、狭山市域の歴史を物語る貴重な資料となっています。



発掘調査のようす

編年から見た埋蔵文化財

旧石器時代

旧石器時代は、食糧となる獲物を追いかけていろいろと場所を移動して生活をし、煮たきなどに使われていた土器が作られていない時代です。狭山を含む平野部では、主な遺物は石器類であり、遺構としては野外炉と考えられる礫の集まったものが、関東ローム層(いわゆる赤土)部分で確認されます。県内の古い石器では富士見市打越遺跡で出土したものがありますので、同じ武藏野台地上にある狭山は旧石器時代遺跡の宝庫ともいえます。

市内の代表的な遺跡としては、入間川左岸に位置する西久保遺跡、森ノ上西遺跡、入間川右岸に位置する上中原遺跡があげられます。特に西久保遺跡では、出土したナイフ形石器から今から20,000年から13,000年前の遺跡であると推定されています。これらは、旧石器時代の狭山を知る手がかりとして、貴重な資料になります。



ナイフ形石器／西久保遺跡出土



彫器／東久保遺跡出土

縄文時代

縄文時代は、縄などを使って土器の表面に文様をつけた素焼きの土器を使い、狩猟・採集で生活をしていた約12,000年前から約2,200年前までの時代をいいます。

縄文土器は、現在作られている陶磁器とちがって、窯を使わず野外で焼くため、約700度から900度と焼成温度が低く黒褐色や茶褐色をしています。また風の当たり具合によって温度が変化するので、部分的に色のちがう所があります。

縄文土器は、時期と地域によって土器の形や文様・装飾にちがいがあり、考古学では、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期と6期に区分しています。狭山市内の遺跡を各期にあてはめると、草創期(3)、早期(3)、前期(19)、中期(37)、後期(16)、晩期(0)となっています。

草創期

はじめて土器が出現した時期です。この時期の土器は、比較的小形で土器の底部が丸かったり、平らだったりしており、文様は、豆粒状に粘土をつけたもの、細い粘土紐を土器の表面に貼りつけ、線状に盛りあげたもの(隆線文)、爪先を土器表面に押しつけたもの(爪形文)などがみられます。

市内の代表的な遺跡としては、上ノ原遺跡、下双木遺跡、西久保遺跡があげられます。この時期の土器は確認されていませんが、旧石器時代末期から縄文時代草創期を特徴づける尖頭器が採集されています。

早期

この時期の土器は、深鉢形で底のとがっている尖底土器が多くつくられる一方、一部では底部の平らな土器もみられます。後半の時期になると条痕文系土器の一部で胎土に纖維を混ぜる土器がみられるようになります。文様は、撚った糸を棒にまきつけ土器の表面に転がしたもの(撚糸文)、棒に刻みを入れて転がすもの(押型文)、貝殻の腹縁を押しつけたもの(貝殻沈線文)、数本単位の条線を土器の表面全体につけるもの(条痕文)などがあります。

市内の代表的な遺跡としては、今宿遺跡、高根遺跡があげられます。

前期

この時期の土器は、煮たき用深鉢がほとんどでしたが、これ以外に用途によって盛りつけ用の台付土器を初めとして、壺や鉢などがつくられるようになります。また西日本ではあまりみられませんが、土器の

胎土に植物繊維を混ぜる繊維土器が、東日本で盛んにつくられます。文様は、これまで少なかった縄目模様が盛んに使われるようになり、土器全体をおおいつくすようになりました。撚った糸を使って木目状の模様をつくるもの(円筒土器系)、いろいろな縄を使って矢羽のような模様をつくるもの(羽状縄文)、竹の切り口を使って模様を描くもの(竹管文)などがあります。縄文時代早期末から前期前半ごろまでは、地球規模で気候の温暖化が続き、現在の東京湾が川越市付近までいり込んでいました。縄文海進と呼ばれるこの現象は、内陸部に広がった海産貝の貝塚の分布によって裏付けられています。

市内では、貝塚は発見されていませんが、代表的な遺跡として、揚檻木遺跡、八木上遺跡があげられます。



深鉢 黒浜式土器／揚檻木遺跡出土

中 期

この時期の土器は、煮たき用深鉢のほか、盛りつけ用浅鉢が定着し、有孔鍔付土器など新しい特殊な形式をもった土器がつくれ始めます。文様は、土器の表面全体をおおいつくすようになります。ただし、いろいろな道具を使ってつける沈線や粘土紐を貼りつけた隆起線が主体となり、縄目模様は、地文として使われるだけになってきます。また独創性のある土器型式が生まれ、口縁部が波打つような波状のものや大形の把手がつけられたものが増え、代表例としては、関東・中部地方に分布する勝坂式土器や新潟県に多くみられる火炎土器があげられます。

中期半ばごろの気候は、縄文時代のなかでも最も安定しており、定住に伴って竪穴式住居が急激に増加し、集落の規模も拡大します。東日本では大規模な環状集落遺跡が分布します。終末ごろの気候は地球規模で寒冷化するため、人口が減って集落が小規模となっていきます。住居の形も柄鏡形住居と呼ばれるものがつくれられ、石を床に敷く敷石住居が出現します。

この時期は、狭山市の縄文時代を特徴づける時期であり、前期に比べ出土品が豊富で、遺跡も多数あります。市内の代表的な遺跡としては、埼玉県選定重要遺跡でもある宮地遺跡を始め、丸山遺跡、揚檻木遺跡、森ノ上遺跡などがあげられます。



獣面把手／丸山遺跡出土 深鉢 阿玉台式土器 深鉢 加曾利臼式土器
／宮地遺跡出土 ／宮地遺跡出土

後 期

この時期の土器は、中期に引き続きいろいろと変化に富み、浅鉢形や、口のふたつある双口土器などが出土してきます。後半になると、ていねいに細かくつくりあげられた土器と煮たき用に粗雑につくられた土器とつくりわけられるようになります。文様は、中期後半から使われている磨消縄文が多く用いられるようになります。また、祭祀の時に使われたとされる土偶・石棒、漁撈活動に必要な石錘(おもり)などの特別な道具も盛んにつくられるようになりました。この時期は、東京湾沿岸を中心に大規模な貝塚がつくれますが、狭山市を含む内陸部では、遺跡数が急に減り、集落の規模も小規模になってきます。

市内の代表的な遺跡としては、高根遺跡、宮原遺跡などがあげられます。

晩 期

この時期の土器は、東日本と西日本でそれちがいをあらわしてきます。東日本では、縄文土器の技法と文様が最高のものにいきつき、精巧な工芸品のような印象をあたえます。文様は、磨消縄文が細かく、複雑に表現されるようになります。代表例としては、青森県木造町で出土した亀ヶ岡式土器があげられます。一方、西日本では、縄文式土器らしくない土器が広がり、土器の形式が単純になり、文様も、縄を使ったものが少なくなり、土器の表面をみがいた無文土器が多くなってきます。これは、新しい文化の芽生え、弥生文化への移り変わりのあらわれといえるでしょう。

この時期の遺跡は市内では確認されていませんが、飯能市や日高市では晩期の遺跡が確認されています。

弥生時代

弥生時代は、狩猟採集生活を続けていたひとたちに稻作が大陸から伝わり、農耕定着型の生活に変わっていった、紀元前3・4世紀から紀元3世紀ごろまでの時代をさし、弥生式土器の型式によって、前期・中期・後期にわけられます。稻作は、初め北九州地方に伝わり前期の弥生文化を形成しましたが、その普及が地域によってまちまちであったことから、それが関東地方に伝わるのは、中期の初めごろと考えられています。このため埼玉県では、前期の遺跡はなく、中期から後期にかけて弥生時代の遺跡が増加していく傾向にあります。

市内では、弥生時代の遺跡が現在のところ確認されていませんが、入間地方に弥生文化が流入してきた経路を周辺の遺跡から知ることができます。現在の研究では、埼玉県内では南関東を中心とした文化と長野群馬から北関東を中心とした文化があり、その境界が川越から東松山にかけた地域であることが土器の分布からわかっています。たとえば、川越市霞ヶ関遺跡では、中期では主に南関東系の土器が根づいていましたが、後期の初めには比企郡を含めた地方色の強い土器が出土しており、北武藏の文化が一時流入していたことがわかります。また、北関東の土器文化の範囲から、入間川流域が南関東の弥生文化圏の最北部に位置していると考えられます。

狭山市の周辺で弥生時代遺跡は、川越市をはじめ所沢市、坂戸市などで確認されており、中期から後期の遺跡が見られる川越市や坂戸市では、沖積低地を中心に遺跡の分布が見られ、後期後半以降の遺跡が見られる所沢市では、主に柳瀬川源流の湧水地に近いところで遺跡の分布が集中しています。県内の弥生時代遺跡の生活基盤は、主に稻作の性格から沖積低地を中心に展開していたと考えられますが、狭山市域での弥生時代遺跡をさがすためには、稻作で必要とされる用水確保と水田開発を考えあわせると、谷戸と呼ばれる小河川谷を中心とした後期の遺跡の存在を確認することが穩当と思われます。

また、関東地方では弥生文化が遅れて普及したために、縄文時代晚期と弥生時代前期が時代的に重複しており、双方の文化圏が並行して存在すると考えられています。飯能市や日高市で縄文時代晚期の遺跡が見られることから、この時期の狭山は、さまざまな文化圏が隣接する地域として学術的にも重要であると考えられます。このような概観のなかで、近い将来、弥生時代の狭山が解きあかされることに期待しましょう。

古墳時代

古墳時代は、盛土をした墓である古墳を作った時代で、紀元3世紀から8世紀ごろまでの時代です。稻作文化による集団活動の中から政治的にも経済的にも力をもった指導者がこぞって古墳を作りました。このため、初めは遠くから見てもひと目でわかり、いろいろな形の大きな墓を作っていましたが、徐々に小さなものになり、一族のもので集まつたと考えられる群集墳などが増えてきました。古墳時代の文化は、中国・朝鮮などの技術などが渡来人によってもたらされたことで、今までの時代と比較できないほど高度に発達をとげますが、仏教の伝来や律令政治の影響により、古墳が作られなくなっていくことで衰退していきます。

入間川流域では、初期の古墳として川越市仙波古墳群の三変稻荷神社古墳(4世紀末、円墳)、大きな古墳として的場の牛塚古墳(7世紀前半、前方後円墳)、南大塚古墳群の山王塚古墳(7世紀後半、上円下方墳)があります。狭山市域では、初期の大きな古墳は確認されていないため、埴輪などの出土を見るはありませんが、古墳時代の遺跡として、左岸



左 坯 土師器 鬼高式土器／上広瀬古墳群出土 右 坯・甕 土師器 鬼高式土器／滝祇園遺跡出土

地域に笛井古墳群、上広瀬古墳群、右岸地域に稻荷山公園古墳群と3ヶ所の古墳群(いずれも7世紀半ばごろ)など古墳数は15基を数え、集落跡としては、左岸地域に沢口遺跡、小山ノ上遺跡、右岸地域に滝祇園遺跡の3ヶ所があります。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、41ヶ所を数え、入間川流域とその支流域に密集しています。特に表面採集調査での遺物の散布が濃密で、当時かなり大規模な集落が帶状に展開していたものと推察されます。特に入間川上流部から下流に向かって左岸側の遺跡では、宮地、上広瀬上ノ原、霞ヶ丘、今宿、森ノ上、富士塚、小山ノ上、御所の内、城ノ越、宮ノ越、字尻、右岸側の遺跡では、滝祇園、峰、戸張、揚櫟木、稻荷上といった大規模な発掘調査が連続的に実施され、当時の狭山のようすを知ることができます。

それによりますと、30~50軒程度の単位集落が入間川両岸の台地上に川に沿った形で存在することが明らかになっています。これらの集落は、入間川に隣接した社寺や莊園を維持していた集落として考えることができましょう。広瀬荘、梅宮神社、次の鎌倉時代に隆盛する入間川宿や柏原郷などを支えていたひとたちが住んでいたと考えられています。

また、このころから、武蔵国も東山道から東海道に編入されるなど地方の街道が整備され、東山道と東海道を南北に結び武蔵国府へ通じる幹線道として、いわゆる鎌倉街道が形成されていきました。この街道と交差する不老川沿いには、七曲井、堀兼の井、八軒家の井の遺跡があり、その付近からは当時の集落跡が認められることなどから、水の得がたい旅人の便宜をはかるために掘られたと考えられています。

甕 須恵器／今宿遺跡出土

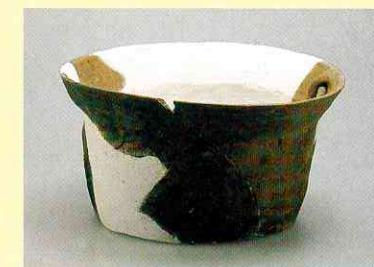
中世

中世は、主に鎌倉時代から戦国時代にかけての時代をさしますが、商品流通が地方にも行き渡り、一般的な生活様式や道具などに地域的な差異が少ないため、土器様式などによるはっきりとした時期区分が見られません。また文献資料もたくさん残っていることから、考古資料は文献資料やその他の資料とあわせて歴史を物語っていく重要な資料になっています。

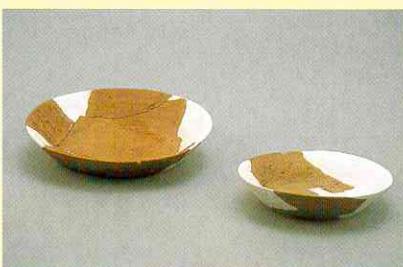
中世の遺跡では、まず鎌倉街道があげられます。市内では鎌倉街道上道が南北に貫いていますが、奥州道、信濃坂、甲斐屋坂などといった名称伝承が裏打ちするかのように、その枝道が多数確認されています。また城館跡としては、柏原地区に室町時代河越夜戦の伝承が残る城山砦があります。小山ノ上遺跡では空堀跡が確認され、館跡の存在を示唆しています。

このほかにも足利基氏の拠点となった入間川御所は、現在でも明白な遺構とされるものが確認されていませんが、中世考古研究での課題であると考えられています。また、江戸時代以降に行政区分となっていく町村なども、この時代からすでに萌芽していることが理解できます。

こうしてみると、文献資料が充実してきている時代だからといって、考古資料の役割を忘れるることはできません。



内耳鍋／英 遺跡出土



かわらけ／英 遺跡出土

近世・近代

この時代は、まだまだ考古学的に重要視されていない部分が多い時代で、狭山の場合でも、この時期の時代背景に基づく遺跡調査がなされていないのが現状です。しかし出土遺構の中には、近世・近代を示唆したものが発掘されています。たとえば、新田開発で形成された堀兼、水野地区などでは、それに付随したと考えられる遺跡が多数見られます。また、七曲井のように各時代にまたがった遺跡から多くの遺物が確認されています。

狭山の場合、現在の集落の中にも近世・近代の歴史的景観がまだ地下に埋没せず保存されており、狭山の歴史を身近に知ることができます。



灯明皿／堀難井遺跡出土

遺物から見た埋蔵文化財

遺物は、単独の出土品としても資料となりますし、遺構からの出土状況などが記録されていることで、資料の価値や時代背景などをより詳細に知ることができます。ここでは、市内で確認された遺物の中から特徴的な埋蔵文化財を紹介します。

衣・装う

衣服や布地が遺物として残存することはたいへんまれですが、その他の遺物から概略的に知ることができます。たとえば、土偶に施された模様は、衣服や入れ墨或いは化粧を表わしているといわれています。また土器の底部には網代の圧痕が残っていることがあります。織物に関連した資料としては、古墳時代の遺物として織り糸を紡ぐ紡錘車が確認されています。

装う遺物としては、縄文時代ではペンダント状石製品が確認されています。この他には古墳時代では、古墳主体部から切子玉、小玉、耳環などが確認されています。

ペンダント状石製品
／宮原遺跡出土



食

縄文時代では、鍤と浮子の出土により、当時の魚を採る道具を知ることができます。奈良・平安時代では、甌の存在によって、いわゆる「ふかす」「蒸す」といった調理技術があったことがわかります。おそらく赤飯、ふかし芋、酒蒸などもあったかもしれません。

炭化物(ウメの種子)
／城ノ越遺跡出土



住

住環境を知る上での遺物としては、奈良・平安時代のものが多く、特に地中での炭化物がよく残存するため、火災にあった住居跡により柱や板の使用したようですが明らかになっています。また住居の竈

の礎材として瓦の出土が見られます。当時狭山周辺で瓦を使用した建物というと、郡衙といった地方官庁や寺院などが考えられますが、用途がちがうにしろ、瓦を使う文化を一般でも知ることができたということから、高麗建郡による渡来人の移住が、狭山周辺のひとたちの生活に大きな影響を与えたと考えられています。



軒平瓦／宮地遺跡出土

信仰の広まり

遺物に見る信仰としては、原始信仰を思わせる石棒があります。石棒では、手で握れる大きさのものから、指の長さほどの小さななものまで、さまざまなものが出土しています。狭山で出土したものの中で、信仰を意識させる遺物は仏教に係わる資料でしょう。仏教の伝来については、高麗郡が設置されたことなどから渡来人によって伝えられたと考えることができます。彼らの存在によって狭山を含めた地域が外来信仰について先進的なところであったと考えられています。その特徴的な遺物である瓦塔^{がとう}が窯跡だけではなく住居跡において出土していることから、仏教への意識が窯跡という生産段階でのものだけでなく、住居跡という一般的生活の中で意識されていたのが理解できます。



瓦塔／宮地遺跡出土

文字の出現

歴史を研究する上で文献資料が大きな役割を果たしていることは、研究者の誰もが認めているところですが、これら出土遺物の中にも文字の出現は資料を理解する上で重要です。ここにある墨書きのある土器は、墨書き土器と呼ばれ、奈良・平安時代の遺跡から出土するものが大半です。墨書き土器は、初期には記号を中心に書かれる場合が多く、後に文字が使われるようになります。なかでも「入間」と「高」の存在は、入間郡と高麗郡と考えられ、この郡境であった狭山地域のようすを知ることができます。また今宿遺跡から出土した「神」「主」は、その位置から広瀬荘のかかわりが考えられます。同様に揚櫟木遺跡から出土した「行心」「月天」は、寺院とのかかわりが見られる資料です。



坏 須恵器 墨書き土器「高」
／宮地遺跡出土



坏 須恵器 墨書き土器「行心」
／揚櫟木遺跡出土

遺構から見た埋蔵文化財

遺構とは、住居や古墳など土地ときりはなすことができない、地面にほりこまれた個別の遺跡です。遺構は、その時代の文化を物語る重要な遺跡であり、時代の変遷によって改良された経緯や、消滅してしまった様式などを知る手がかりとなります。たとえ遺物が出土しなくても遺構と認められるものもあります。ここでは、狭山市域で確認された遺構から見た埋蔵文化財を紹介します。

墳 墓

遺構としての墳墓ではすぐに古墳が思い浮かびますが、その時代の生活様式や新しい文化、死者に対する敬慕や当時の信仰を知る上で重要な遺跡です。墳墓に係わる遺物としては、主に被葬者、副葬品であり、遺構としては、古墳のような形状や葬送形式などが参考となります。これらのようすは、弥生時代以前では主に被葬者や副葬品によって確認されますが、弥生時代の後半になると墳墓は周囲に溝を掘り、古墳時代になると、溝の内側を盛土して古墳の形式が生まれてきます。古墳時代は象徴的な時代でしたが、いわゆる「大化の薄葬令」の発布と仏教の普及によって、古墳は小規模なものに

なり衰退していきました。その後の時代では、火葬も土葬も行われていましたが、江戸時代になると、宗門制度と儒学の孝行の思想から寺墓地での土葬が中心となりました。

狭山では、古墳後期の小規模な群集墳、江戸時代から明治時代にかけての火葬墓、土葬墓が確認されています。この時代の火葬墓では、当時では不治の病のため亡くなったひとたちのために作られたものと考えられます。

上広瀬古墳群



城 館

遺構としての城館ではすぐに城郭が思い浮かびますが、一般的には土を掘ったり盛ったりして造った施設で、立体的で軍事的意味合いの強いものが城で、平面的で居住的意味合いの強いものが館と呼ばれます。古い形態としては、弥生時代に見られる環濠集落などは、中世ヨーロッパの城郭都市を思わせる性格を持っていると考えられます。また古代においては、朝鮮式山城や平安京などのような国家規模で築城されたものが主でしたが、武士の時代になると、その所領を管理するための館が多く造されました。そして一国支配が可能になる室町・戦国時代では、軍事的意味合いが強い戦国山城や一国の象徴である平城などが造されました。

狭山では、渡河の要衝である入間川と広大な平坦地である武藏野が位置することから、南北朝時代から戦国時代にかけて多くの合戦がありました。特に天文6(1538)年河越夜戦での上杉憲政の陣所と伝えられている城山砦は市内に残る重要な城館遺構です。また小山ノ上遺跡では堀跡とそれに付随する柱穴群が出土したことから、連続した城館遺構が存在すると考えられます。



城山砦

道 路

遺構としての道路では、南北交通の中軸として鎌倉街道を考えることができます。鎌倉街道は武家が幕府政治を行う上で中心となった鎌倉へ向かう主要道として、その名がつきましたが、古代では、東山道・上野国と東海道・相模国を結ぶ道として、また武藏国・国府につながる道として重要な役割を果たしていました。狭山周辺には、渡河の要衝である入間川が流れ、荒涼とした平坦地である武藏野が広がっていることから、鎌倉街道もさまざまに分岐しています。近世になると八王子千人同心が月番で往復した日光脇往還として栄えました。

また、東西交通についても、川越から青梅、あるいは飯能といった入間川沿いの街道、南部の新田開発地域を東西につなげる新河岸街道など交易を中心につながる発達していったと考えられる街道が多数あります。遠くは旧石器、縄文時代の八ツ岳産の黒曜石、縄文時代の長野・山梨産の土器が交易され、近くは戦国時代の武田氏家臣が移住したというように、これらの交通の起源も古くさかのぼることがで



近世の街道／堀難井遺跡

家 屋

遺構としての家屋では、このあたりでは縄文時代以来の竪穴式住居跡と奈良・平安時代から一般化してくる建物跡があります。

竪穴式住居跡では、地面の掘り込みにより時代を知ることができます。縄文時代では、丸形の掘り込みに屋根を葺いた形になります。弥生時代になると、隅に丸みを帯びた隅丸形の掘り込みになります。奈良・平安時代になると方形の掘り込みになります。またこの時代では、煮炊きの施設が炉から竈に変わっていきます。狭山地域では、竈の位置が住居の東壁か北壁に設置してあります。

建物跡は、柱に根太をまわし床面を張ったもので、弥生時代ごろからありますが、狭山地域では奈良・平安時代の遺跡から、柱穴を掘って直接柱を埋める掘立柱建物跡が多数確認されるようになります。時代が下っていくと、建物の安定性から沓石による基礎を持つ建物が増えています。近世になるとさらに、沓石による基礎の下に栗石による基礎工が加えられ、一戸建の在来工法として現代に至っています。



縄文時代の竪穴式住居跡／丸山遺跡出土

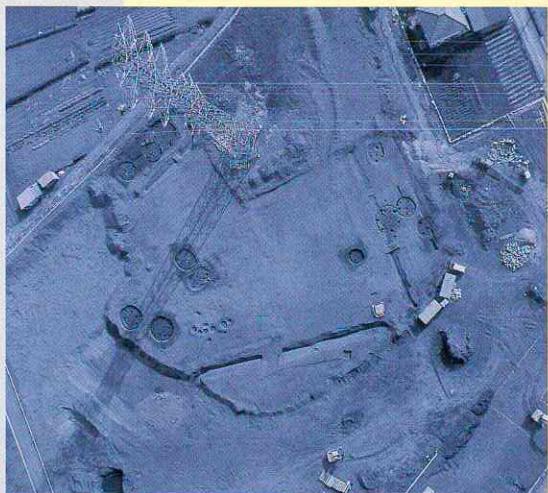


奈良・平安時代の竪穴式住居跡／城ノ越遺跡出土

集 落

集落はいくつかの家族が共同して生活するところから生まれますが、それが遺構として形づいてくるのが縄文時代に現れる環状集落でありましょう。宮地遺跡や丸山遺跡で見られる集落跡はその一例となっています。弥生時代になると、周囲に堀をめぐらした環濠集落となっていきます。奈良・平安時代になると、武藏国、高麗郡、広瀬郷といった行政区割が生まれ、それぞれを構成する単位集落が遺構としての集落を形成していたと考えられます。この時期では、方形の竪穴式住居跡と建物跡が集落を形成しているため、集落に方位の概念があることを知ることができます。

これから時代を経て、現在のニュータウンや団地など高層住宅の基礎だけを見て、未来のひとたちはどのような住居を推定するのでしょうか。



縄文時代の集落／丸山遺跡



奈良・平安時代の集落／揚櫛木遺跡

鍛冶工房

鍛冶遺構としては、工房、製鉄炉、作業場、木炭貯蔵穴、などがあります。全国的には弥生時代のものから確認されていますが、狭山では奈良・平安時代の鍛冶工房が確認され、ふいごの羽口や道具類が出土しています。鍛冶遺構は材料と燃料の調達できる地域で確認されることが多く、「砂鉄七里に炭三里」といった俗言があるように、材料の鉄だけではなく燃料の炭を大量に確保する必要がありました。狭山の場合、入間川左岸で鍛冶遺構が確認できることから、現在の智光山公園を中心としたマツや雑木を炭材としていたと考えられます。

関東地方での代表的な遺跡としては、大井町東谷遺跡で大規模な製鉄炉と炭焼き窯が多数確認されており、最近の研究では、このような鍛冶遺構の存在・分布から、平将門の乱から芽生えた東国武士出現の背景となったのではないかと考えられています。



ふいごの羽口／宮地遺跡出土

これから狭山の埋蔵文化財

－21世紀に向かって－

今回の企画展で、みなさんは狭山の埋蔵文化財についてどのようなイメージをおもちになりましたか。これから21世紀に向かって、狭山の埋蔵文化財にはいくつかの課題があります。

まず、今回の企画展でもおわかりのように、いまだに確認されていない狭山の「空白の時代」をどうとらえるか、という課題があります。たとえば、縄文晩期から弥生時代にかけての時期では、周辺地域の出土事例から見た関連性を注視していく必要があります。古墳時代前期のようすについても、埼玉古墳群に代表されるような大型古墳が存在しない狭山で、その時代の集落などの痕跡が見いだされる可能性があります。

次に、重層遺跡の可能性を否定しえない地区が多い、ということも重要です。たとえば、滝園遺跡では包蔵地が家屋の密集した地区であったため、表面採集調査では確認されませんでしたが、発掘調査では7世紀ごろの遺跡の存在が明らかとなりました。このことは中世以来栄えてきた入間川宿の地下に、それ以前の歴史を刻む遺跡が眠っていることが類推されます。このような事例は、七曲井がある入曾地区、広瀬荘の中心であった広瀬地区など、社寺を中心に形成された村々においてその可能性をみることができます。

また、これら学術的な課題に加え、首都40キロメートル圏内にある狭山市は、21世紀を迎えるにあたり、さらなる発展を遂げることにより人口増加に伴う都市基盤整備の必要性が叫

ばれ、その中で土地利用と埋蔵文化財との関わりをどう考えていくのか、も大きな課題です。ご存じのとおり、土地と埋蔵文化財とは切っても切り離せない関係にあります。しかし、埋蔵文化財を保護し、後世に伝えていくことは、過去と未来をつなぐ現代の私たちの責務であります。

狭山市も文化的なまちづくりを推進する上で、狭山の埋蔵文化財をどのように取り扱っていかなければならぬのかが、21世紀に向けての課題であります。地域を知るための実践のひとつとして、博物館もその一翼を担っていることを忘れてはならないと思います。



狭山の空白の時代を埋める
深鉢 安行II式土器（縄文時代後期後半）
／城ノ越遺跡出土

七曲井

七曲井は、狭山市大字北入曽にあり、埼玉県の史跡に指定された井戸です。形状は、すりばち状の傾斜面を持ち、その底部に井桁を組んであります。このような井戸を漏斗状井戸といい、一般的には井桁の場所まで降りる道筋がかたつむりのように螺旋を描いているため、「まいまいづ」と呼ばれています。同様な例として、東京都羽村市のまいまいづ、伊豆七島新島の掘井戸などがあり、練馬区石神井や小平市などに漏斗状井戸の存在を伝える伝承地があります。最近では東京都府中市などで遺構として出土しています。

このような漏斗状井戸は、関東地方の、とりわけ武藏野と呼ばれる地域で見られる特徴的な井戸であることから、平安時代の和歌や『枕草子』で記された「ほりかねのい」に比定され、その地名から七曲井も「ほりかねのい」の代表的なものとして都にその名をはせていました。

七曲井は、水のとぼしい武藏野の台地にあって付近のひとたち、近所のひとたち、そして入間路を行くひとたちに飲み水を供給していました。安政4(1857)年に書かれた「七曲井略縁起」の記述によれば、井戸が掘られたのは、奈良時代の宝亀8(777)年とあり、武藏国の国府の手によって掘られたものと推定されます。また、宝暦9(1759)年の「七曲井修復願」によりますと鎌倉時代の文永7(1270)年の修理をはじめとして、5回にわたる修理が記録されています。



七曲井／全景



板碑／文永九(1272)年銘



板碑／元徳三(1330)年銘

狭山の埋蔵文化財展 展示資料一覧

資料名	出土地・備考	資料名	出土地・備考
編年から見た埋蔵文化財		中世	小山ノ遺跡出土 英遺跡出土 英遺跡出土 町久保遺跡出土 英遺跡出土 今宿遺跡出土 小山ノ上遺跡出土＊ 小山ノ上遺跡出土＊ 小山ノ上遺跡出土＊
旧石器時代		板碑 宝徳四(1452)年銘 かわらけ かわらけ 内耳鍋 藏骨器 板碑 貞和五(1349)年銘 板碑 延文三(1358)年銘 板碑 応永十六(1409)年銘	
ナイフ形石器 チャート製 ナイフ形石器 メノウ製 ナイフ形石器 チャート製 彫器 貞岩製 ナイフ形石器 チャート製 彫器 チャート製 ナイフ形石器 黒曜石製 細石刃 黒曜石製	西久保遺跡出土 上中原遺跡出土 森ノ上西遺跡出土 森ノ上西遺跡出土 東久保遺跡出土 東久保遺跡出土 沢口遺跡出土 沢口遺跡出土	近世・近代	堀難井遺跡出土 今宿遺跡出土
縄文時代		灯明皿 銅錢 「寛永通寶」 [参考資料] どろめんち	
〈草創期〉	両面加工尖頭器 凝灰岩製 有舌尖頭器 砂岩製	遺物から見た埋蔵文化財	
〈早期〉	沈線文系土器 破片 押形文土器 破片 深鉢 野島式土器 尖底深鉢	衣・装う	宮原遺跡出土 上広瀬古墳群出土 峰遺跡出土 城ノ越遺跡出土 宮ノ越遺跡出土＊
〈前期〉	深鉢 黒浜式土器 深鉢 黒浜式土器 黒浜式土器 破片 諸磯 a 式土器 破片 諸磯 b 式土器 破片 諸磯 b 式土器 破片 諸磯 c 式土器 破片 深鉢 十三菩提式土器 深鉢 十三菩提式土器 深鉢 十三菩提式土器	食	炭化物 (ウメの種子) 炭化物 (小豆類) 甌 須恵器 甌 須恵器
〈中期〉	深鉢 阿玉台式土器 深鉢 勝坂式土器 深鉢 勝坂式土器 深鉢 勝坂式土器 深鉢 勝坂式土器 深鉢 勝坂式土器 深鉢 勝坂式土器 人面把手 獸面把手	住まい	丸瓦 丸瓦 丸瓦 軒平瓦 平瓦 平瓦 平瓦
	深鉢 加曾利 E I 式土器 深鉢 加曾利 E I 式土器 深鉢 加曾利 E I 式土器 深鉢 加曾利 E II 式土器 深鉢 加曾利 E III 式土器 深鉢 加曾利 E III 式土器 深鉢 加曾利 E III 式土器 有孔鍔付土器 加曾利 E III 式土器 深鉢 加曾利 E IV 式土器 深鉢 ニコア土器 加曾利 E 式土器 深鉢 ニコア土器 加曾利 E 式土器 深鉢 曾利式土器 深鉢 曾利式土器 砥石・磨製石斧	信仰の広まり	瓦塔 瓦塔 石棒 砂岩製 青銅鈴 青銅鈴 炭化物 横笛
〈後期〉	深鉢 称名寺式土器 深鉢 称名寺式土器 深鉢 堀之内式土器 安行II式土器 破片	文字の出現	宮地遺跡出土 宮地遺跡出土 宮地遺跡出土 宮地遺跡出土 丸山遺跡出土 丸山遺跡出土 宮地遺跡出土 宮地遺跡出土 宮地遺跡出土 宮地遺跡出土 宮地遺跡出土 稻荷上遺跡出土 字尻遺跡出土 揚櫛木遺跡出土 宮地遺跡出土 森ノ上遺跡出土 宮地遺跡出土 宮地遺跡出土 丸山遺跡出土 八木遺跡出土 丸山遺跡出土
弥生時代		坏 須恵器 墨書「正」 坏 須恵器 墨書「正正」 坏 須恵器 墨書「高」 坏 須恵器 墨書「門下」 坏 須恵器 墨書「大」 坏 須恵器 墨書「土」 坏 須恵器 墨書「主」 坏 須恵器 墨書 坏 須恵器 刻書「佐」 坏 須恵器 墨書「行心」 坏 須恵器 墨書「月天」 坏 須恵器 墨書 焼印 「高」 円面鏡 須恵器 円面鏡	宮地遺跡出土 宮地遺跡出土 宮地遺跡出土 宮地遺跡出土 今宿遺跡出土 今宿遺跡出土 今宿遺跡出土 上広瀬ノ原遺跡出土 小山ノ上遺跡出土＊ 宮ノ越遺跡出土＊ 揚櫛木遺跡出土 揚櫛木遺跡出土 揚櫛木遺跡出土 今宿遺跡出土 今宿遺跡出土 今宿遺跡出土
〈後期〉	小型壺 壺 台付甕 高杯 壺 壺	遺構から見た埋蔵文化財	
		鐵治工房	宮地遺跡出土 宮ノ越遺跡出土＊ 宮ノ越遺跡出土＊ 宮ノ越遺跡出土＊ 宮ノ越遺跡出土＊ 宮ノ越遺跡出土＊ 金井遺跡出土 今宿遺跡出土 今宿遺跡出土 今宿遺跡出土 今宿遺跡出土 今宿遺跡出土 今宿遺跡出土 今宿遺跡出土 今宿遺跡出土 今宿遺跡出土 今宿遺跡出土 今宿遺跡出土 今宿遺跡出土 今宿遺跡出土 今宿遺跡出土 今宿遺跡出土 今宿遺跡出土
古墳時代		ふいごの羽口 椀滓 燧鉄 刀子 刀子 雁又型鉄鎌 鉄滓 刀子 やっこ 尖根型鉄鎌 釣針 釣針 鋤 鎌 ちょうな？	
坏 土師器 鬼高式土器 坏 土師器 鬼高式土器 坏 土師器 鬼高式土器 坏 土師器 鬼高式土器 坏 土師器 鬼高式土器 坏 土師器 鬼高式土器 甌 土師器 鬼高式土器 壺 土師器 鬼高式土器 甌 土師器 鬼高式土器	上広瀬古墳群出土 上広瀬古墳群出土 滝祇園遺跡出土 滝祇園遺跡出土 滝祇園遺跡出土 滝祇園遺跡出土 滝祇園遺跡出土 滝祇園遺跡出土 滝祇園遺跡出土	七曲井	七曲井出土 七曲井出土
奈良・平安時代	坏 須恵器 火だすき痕あり 坏 灰釉陶器 皿 緑釉陶器 銅錢 「紹聖元寶」 銅錢 「皇宋通寶」 青銅把手	板碑 文永九(1272)年銘 板碑 元徳三(1330)年銘 [参考資料] 板碑 寛正四(1463)年銘 [参考資料] ささげ桶	(七曲井にて使用されたもの) (七曲井にて使用されたもの)

注) 1) *が末尾についた資料は、埼玉県埋蔵文化財センター所蔵のものである。
2) 資料の性格上、一括の出土資料として表記したことがある。このため、点数については省略した。